

けて必死の體當りを食はせたものである。そこから自然と頭の下がる尊い藝術が生れてくるに  
なんの不思議もないのである。生きた證據は、東亞大戦争に實現された我が將兵の赫々たる奇  
蹟的大捷の戦果に見れば、立ちどころに合點されるだらう。著者は、最も親しみ深い今の文樂  
人諸子の自省發奮、猛々訓練、烈々研究を心から祈願するものである。

### 三味線弾きの名手

團平、廣助、その他かずかず

巨匠三世長門太夫の三味線を二十六年間弾いたのが名手三代目鶴澤清七、但馬國の山奥から  
出た、その勝右衛門時代には但馬の鬼勝と呼ばれたほど、頗る劇しい藝の荒神、亭主も亭主、  
女房も女房。

氏太夫を弾いた初代鶴澤勝七は、節附の名人、攝津西宮で勝鹿齋といふ名で納まつてゐたが、

西宮の勝七で通つてゐた。俗稱なまこの勝。太功記十段目惣稽古の樂屋から突然跡をくらまして西の宮へ落ちる、これもたゞのなまこでない。

鶴澤友二郎、野澤喜八郎、といふ二つの元祖名のどちらも五代目を一人で襲いだが、五代目友二郎である、人品はよし徳望があつたと見える、京は祇園町繩手住、同廓女紅場教師としてをさまる。

大阪の難波から鬼が出たと云ふ、難波村の産、四代目鶴澤寛治こと鬼寛治、清七の俎馬の鬼勝に次ぐ腕達者、例の千兩轎の曲弾きを創めた天保頃の立者である。

その弟の疊辰、本名疊屋の辰造、藝名竹澤龍造、これが兄以上に曲弾きを流行らせ、櫓太鼓で雷名を轟かしたのでモウ一つ太鼓辰といふ名が殖えた。京町堀籠屋町に住む疊屋さん。

京都で生れた二代目鶴澤才治は、大阪で修行して立者となり、この曲弾きを江戸へ輸出した、

その結果は本家の大阪よりも、ずつと大流行になつた。俗稱糸遊、山城伏見でまだ四十三の藝ざかりに歿去。



豊澤廣助

曲弾きとは云つても、後世のやうに、扇、蠟燭、湯呑、巻煙草で弾くといふやうな輕業めいたことは道がにしてゐない、無論肩や頭の上へ載せて弾くなど、もつての他のことだ。

明治二年堀江の芝居で、竹澤彌七が大三味線を弾いた。俺れだつて負けるものかと、松葉屋五代目豊澤廣助が二貫目もある釘貫で、阿古屋の三曲を弾いた。さうして溜飲を下げてゐると、

組合の因講から、邪道だと云つて除名された、團平が仲裁をしたので除名だけは助かつたが、當時の淨瑠璃道には、まだ武士道が遺つてゐた。

三味線弾きで而かも赤貧の中から、二十萬からの財産を作つたのは實に珍らしい。この廣助の父の茂太夫が大酒家で家政に疎く、廣助にウンと借金を残したので貧乏がよほど身に沁みてゐたものと見える。しかし立志傳中の一人。

廣助の家號を松葉屋と呼んだのは、女房のはながお茶屋をしてゐた時の家號で、云はゞちよつと意氣筋なので、仁左衛門の松嶋屋にかけてこんな家號を名乗つたのである。團平と並び稱せられた絃道の大統領、惜しいことには類のない見事な撥捌きをのこして七十四歳で玉の緒を斷つた。

十九の時に大家巴太夫を弾き、二十一の時に越前大掾を弾いて、後には攝津大掾をあれほどの大物にしたといふ三代目野澤吉兵衛は、なる程名人團平に劣らぬ巨匠だ。この吉兵衛は、住友家へ出入りをした魚屋の伴だといふことだ。わづか四十二歳で死んだのは惜しい極みだ。東京で亡くなつたが、この人も廣助も京の生れ、京はお寺と都紅と三味線名人の本場らしい。

此人の他に眞似手のない點は、どんな大物を弾いても、三味線の糸を損じない、従つて糸を

繰り出すことがない、調子を替へるにもたゞ天柱をキュツとひねつて置けば、それで思ふ坪にはまつたのだ。名人にもいろいろの型がある。

名人豊澤團平は文政十一年生、十一歳で三代目豊澤廣助の門に入り、博勞町稻荷文樂軒の芝居へ出る。二十八歳長門太夫に見出されズツと文樂出演、明治十六年六月櫓下となる。十七年七月憤然文樂を去つて稻荷彦六座に移る。

二十八歳で櫓下長門の三味線に抜擢された時は、この若輩で長門の忠九と長尾の忠六と三光齋の太中を同時に弾いてゐる。健腕驚くべし。

藝を磨くものには女は禁物だといつて、三十歳まで女人禁制の祈願を立て、三十一歳で妻を娶つた、この妻が二人の兒を残して死んだ、その跡へ迎へた後妻が有名な千賀女である。千賀女は京の西陣の染物屋の娘で、松山の城主板倉周防守の女中から殿様の嬖妾になつて、後に下賜金を貰つて、祇園で茶屋を開いてゐたのだつた。

長門太夫が千本櫻のすしやを語つた。權太が鮎桶を持つて向ふへ入るところ、「金の鮎桶、これ忘れてはと、ひつさげて跡を慕ふて……」と一步踏み出す途端、長門の氣合ひと團平の受け撥、それに玉造の人形の意氣込みとがカツチリ合つて、玉造の腹帯がブツリと切れた。たいへんな力のものだ。

團平の三味線の棹は、かういふ氣合ひが籠つてゐるので、二と三の糸道が、まるで鐵道線路のやうに二本の溝が掘れる。一ヶ月と同じ棹を使ふものなら、絃が溝へ嵌り込んで音色が出ないのだ、嘘のやうだが實際だ。

まだ他にも、二十四孝の四段目を弾いた時、例によつて精神が棹へ集注したと見るや否や、テンジから二寸許り下部——コハリの坪のところ——から棹が削けてしまつた、といふやうなこともある、太棹の神秘談。

太功記の十段目、『現はれ出でたる』といふ例の光秀の出、たゞさへ力の籠る團平である。

恐ろしい大ノリのタ、キが雷のやうに響いて表の木戸番が、道具が倒れたのだと早合點して、素破こそと勘定場へ飛び込んで來たといふ事實がある。

志渡寺、合邦、太十、帶屋、河庄、堀川、日向嶋——。團平の絃はまるで太夫の語る以上に、切實な情景を現はしてくる。纏綿の情緒、豪宕壯大、閑寂凄慘、とても字句が無い。

團平は若年の頃、仲間の交りは好くなかつた、友人といつたものは殆ど無かつた、たゞ一まゝに藝道修行の他はなかつた。ヘンチキと云はれ、ちよつと足らんと云はれ阿呆抜ひされたが、自分の先祖は清和源氏の筋目正しい武士である、俺は武士の嫡流だといふ誇りを堅く持してゐた、この自覺があつたから周囲の誘惑を事とせず、藝一心に勉強した。それに養父の千賀太夫の厳しい訓育が——武士の心を忘るな、そして天下の達人になれ——そこで武道を研ぐ意氣で三味線と體當りをやつたものだ。

市川齋入の右團治が名人團平に會ひたくて堪らず、堀江の彌太夫に紹介を頼み込んだ、彌太

夫は右團治と親しかつたが、團平の河原乞食根性の役者といふものを嫌ひであることも知つてゐた。そこで、右團治が役者ながら大の親孝行だと云うて、會うてやつてくれと頼むと、親孝行なら會はうと、直ぐ快諾、彌太夫の家で會見、愉快に一夜を話し合つた。團平の親孝行のこととは後に叙べるが、右團治の親孝行を知る人は少ない、母親が死んだその夜伽の晩に、傍に人の居ないのを見圖らうてソツと蒲團にもぐり込んで、母の死骸を抱きしめて泣いたさうだ。

團平は無論貧乏だつた、それは藝道以外に金錢など思はぬからだ。彼がまだ獨身時代のこと、或夜泥棒のお見舞を受けた。團平は盗人にかう云つた。『芝居用の着物と三味線と撥の外なら、なんなりと持つて行きなされ』で盗人はそんなものには用はないと、團平の差出す財布を掴んでそのまゝ、影を消した。盗人はあとで財布を開いて見ると小遣錢と思ひの外百十兩といふ大金が入つてゐたので吃驚した。後に捕まつた盗人はとうとうその金に手をつけるのが氣味が悪かつたといつて持主へ返して來た。

團平は非常な親思ひで、それも死んでもう此世にゐない両親によく仕へた。命日には、午前



六時に起床、齋戒沐浴して、二階の佛間に籠つて淨机に系圖の一卷を展き、先祖代々父母の法名本名を唱へ、讀經をする。それがすむと、佛前に備へた生魚を自ら料理して、お餘りだと云つて朝食に戴く。これは亡母の遺言に基くのだといふことである。而かも五十年一日の如く欠かさなかつた。



豊 澤 團 平

明治三十一年四月二日、稻荷座の二日目、大

隅の志渡寺を弾いてゐたが、もう淨瑠璃もあと一枚のところまで語つて來た時、團平は撥を固く手に握つたまゝ動かなくなつた。腦充血を起したのだ。すぐ擔架で病院へ運ばうとしたその途中、三休橋の北詰まで來た時、彼れはもう息

をひき取つてゐた。七十二歳であつた。

團平の枕邊へ集まつた親類や知己の人々は、葬式をする貯への金の無いのに當惑してゐたが、

平生よく紙屑籠になんでも物を抛り込む癖のある團平のことだから、念の爲めにといふので屑籠をひつくり返して調べて見ると、案の定封のまゝの金包みが幾つも出て來た。

二十萬の財産を作つた廣助は、死んだ團平の手を取つて、『この手だけは何萬兩でも買はれぬ手だ』と廣助らしいことを云つた。

團平には澤山の門人もあるが、彼の教へを受けたものは、總計千二百六十名に達してゐたといふことである。蓋世の名人はかうして世を去つたが、その遺香は元より斯道を益したこと偉大だが、こゝに一面團平ほどの氣概あつてこそ通用する冒險的破壞的に似た性格を、無暗に後輩が模倣して空威張りをするといふやうな風も、悪い影響として残つたのは残念なことだ。

私は近頃、帛紗に書いた彼の和歌を見た。

さゝかたのいとやさしくも散る花を、とめてくれ行く春惜みつつ